モモンガ様が女の子のサブアカウントでログインしたようです

香介

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒドインのせいでオーバーロードのヒロインがわからない。ならば、世界で一番可愛い骨であるモモンガ様がヒロインになればいい。そう思って書きました。最初に言っておきます。申し訳ありませんでした。

※女の子になったモモンガ様（元男）がいろんな男に言い寄られるので、一応ボーイズラブタグつけました。

ただ、モモンガ様が女の子になっているので、なんとも言えません。要らないって言われたら、消します。

簡単に言うと、モモンガ様が女の子のサブアカウントでログインして、至高メンバー（たっち・みー、ウルベルト・アレイン・オードル、ペロロンチーノ、タブラ・スマラグディナ）と冒険する話です。

注意事項

・至高メンバーたちの冒険をメインにするため、ナザリック地下大墳墓ごと移動しません。つまり、ＮＰＣがいません。

・モモンガ様が女の子のサブアカウントでログインします。つまり、ネカマ。

・たっち・みーさんは独身のモテ男に設定を変更しました。

・モモンガ様総愛され。

・モモンガ様は嫁だ。異論は認めない。

・独自解釈あり。

・原作にはない設定あり。主に魔法について。設定の捏造・改変が

多く見られます。申し訳ありません。
・至高メンバーの口調がわからない。
一人称は、たっち・みーさんは「私」、ウルベルトさんは「私」ただし、素は「俺」、ペロロンチーノさんは「俺」、タブラさんは「私」とさせていただきます。
・至高メンバーの設定がわからない。全て私のイメージ。
・文才がありません。
お願い
この物語に多くの捏造・改ざんを含みます。苦手な方は閲覧をお止めになることをお勧め致します。
また、至高の方々が出てくる小説があるそうですが、作者は（お金がないので）その小説を読んだことがなく、勝手なイメージだけで至高の方々のキャラクターを作っています。もうこの物語を書き始めてしまっているので、このままいく予定です。ご了承ください。

目　次

こうして、モモンガ様はヒロインになった1 ―――― 1
こうして、モモンガ様はヒロインになった2 ―――― 5

こうして、モモンガ様はヒロインになった1

ＤＭＭＯ―ＲＰＧ〈Ｄｉｖｅ　Ｍａｓｓｉｖｅｌｙ　Ｍｕｌｔｉｐｌａｙｅｒ　Ｏｎｌｉｎｅ　Ｒｏｌｅ　Ｐｌａｙｉｎｇ　Ｇａｍｅ〉。

仮想世界で現実にいるかのごとく遊べる体験型ゲームのことである。

ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ（ユグドラシル）

二一二六年に発売されたそのゲームのタイトルは、数多開発されたＤＭＭＯ―ＲＰＧの中で、その広大なマップと異様なほど広いプレイヤーの自由度から、日本国内において爆発的な人気を博した。

それから十二年、ユグドラシルは最後のときを迎えようとしていた。

1

ユグドラシルのサービス最終日、ナザリック地下大墳墓の円卓には五人のプレイヤー――モモンガ、ウルベルト・アレイン・オードル、たっち・みー、タブラ・スマラグディナ、ペロロンチーノが集まっていた。

五人は所属するギルド、アインズ・ウール・ゴウンのギルド長であるモモンガの招集に応じたメンバーであり、サービス終了までの残り少ない時間を楽しんでいた。

「ユグドラシルのサービス最終日とはいえ、メンバー全員が集まるなんて思ってもいませんでしたよ」

モモンガが笑顔の感情（モーション）アイコンを浮かべ、楽しそうにそう言った。

ギルド、アインズ・ウール・ゴウンにはかつて四十一人のメンバーが所属していた。しかし四十一人中、三十六が辞ていった。そして、残りの五人のメンバーが今円卓にいる全員である。

モモンガはその全員が自分の出したメールに答えてくれたことが、

心の底から嬉しかった。
「本当ですね。皆さん時々ログインしていたとはいえ、五人全員が集まったのは1年ぐらい前じゃないですか？」
たっち・みーの発言に全員が頷き返した。
皆、時間を見つけてはログインをしていたが、誰かと会うことは少なかったのだ。そのため、五人全員が集まるのは久しぶりであり、こうして全員で集まれたのは僥倖だったのである。
「皆さん忙しいくて、毎日ログインしていたのは俺だけでしたしね」
ギルド長であるモモンガは、メンバーの誰よりも多くログインしていた。辞めたメンバーも含め、ギルドのメンバーがいつ帰ってきても良いように、ギルドの維持をしていたのである。
そのことに、メンバー全員はひどく感謝していた。
「そういえば、モモンガさんは一人の時、ギルドの管理以外何をしていらしゃったんですか？」
「そうですね…。主に素材と資金集め。あとは、サブアカウントでログインして、クエストをこなしたりしていました」
「あれ？モモンガさんがサブアカ持っていたの!?俺聞いたことなかった!!」
モモンガの答えにペロロンチーノが頭上に驚きの感情（モーション）アイコンを浮かべ、大きな声を上げた。
他のメンバーもモモンガのサブアカウントの存在は知らなかったようで、ペロロンチーノ同様に驚いていた。
「……その、なんだか恥ずかしくて、皆さんに教えることができなかったんですよ」
モモンガが困り顔の感情（モーション）アイコンを浮かべながら、明らかに困惑の色が分かる声でそう返答すると、タブラが驚いた様に声をあげた。
「おや、モモンガさんが私たちに見せられないようなアカウントを作るなんて、想像がつきませんね」
タブラの疑問はもっともだと他のメンバーも心の中で同意した。モモンガ他人に恥ずかしいと思われるようなことは滅多にしない人物である。そして、なかなか気心知れた仲である自分たちに対して、

見せることをためらうとは、いったいどのようなアカウントなのか想像ができなかった。
　そのため、メンバーたちはモモンガのサブアカウントに興味を惹かれた。
「ほう、興味があるので、もし良かったら見せていただきませんか？」
「え!?ウルベルトさんは俺のサブアカウントを見たいんですか？」
「ええ、ぜひとも。皆さんも見たくはありませんか？」
　悪戯っぽく笑いながら聞いたウルベルトに、内心見てみたいと思っていたモモンガ以外のメンバーが頷き返した。
「すっごく見たいです!!」
「ペロロンチーノさん!?」
「私からもお願いします」
「タブラさんも!?」
　二人の答えにモモンガはわたわたし始めた。そんな様子のモモンガには悪いと思ったが、たっち・みーも興味があるので正直に答えることにした。
「私も見てみたいので、お願いしますね。モモンガさん」
「うぅ…。たっちさんもですか……」
　小さく唸りながら少し考えたモモンガはしばらく考えた結果、せっかくの最終日なのだから見せるのもやぶさかではないと思った。
「……わかりました。皆さんにお見せします。」
「やったー!モモンガさんのサブアカウント見るの楽しみ!!」
「あの…、でも、一回ログアウトしてからここに来るには、三分程かかりますけど、いいですか？」
　その言葉にメンバーは嬉しそうに頷いた。
「構いませんよ。でも、ギルドのトラップの方は大丈夫なんですか？」
「それなら心配には及びませんよ、たっちさん。サブアカウントはメインアカウントとアイテムを共有できますから、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを装備することが出来ます。指輪を着ければ、

トラップに引っかかることはありません」
「なるほど。それなら安心ですね」
「はい。それでは、一回ログアウトしますね」
モモンガはそう言うとコンソールを操作してログアウトした。

こうして、モモンガ様はヒロインになった2

モモンガがログアウトしてから、残りのメンバーはモモンガサブアカウントについて思い思いに想像し、意見を交わして過ごしていた。

「そろそろモモンガさんが戻って来る頃ですかね？」

タブラがそう言って、時計に目をやる。モモンガがログアウトしてから3分が経過していた。

はたしてどの様なサブアカウントなのだろうかとメンバーは心が弾み、待ち遠しく思う。

その時、円卓のドアが開いた。

「お待たせしました皆さん」

ドアが開いたと同時に、円卓に可愛らしい声が響いた。

全員がその声に驚きつつもドアの方向に視線を移し、自身が見た光景に驚いて言葉を失った。

そこに立っていたのは、金糸の刺繍が織り込まれた豪華な白いローブをまとった人間の――――少女だったのだ。

意外すぎたその容姿に、メンバーたちは思わず深く観察してしまう。

円卓に入ってきた少女は、可愛らしさと美しさを兼ね備えた様な整った顔立ちをしており、はにかむような笑みを浮かべている。

肌は真珠の様に白く、瞳はアクアマリンを彷彿させる青色。腰まで伸びるふんわりとした銀色の髪は絹の様に美しい。

身長は小さいが、スタイルはなかなか整っている。

美少女と呼ぶにふさわしい容姿だ。

首には金色に輝く十字架をかけおり、頭には美しい宝石が散りばめられたティアラをしている。

そして、白い長手袋をした華奢な手に、蛇が十字架を中心にからみあい、左右に白い羽根が浮かんでいる意匠で、彼女の背を優に越す大きな杖を持っていた。

端的に言えば、おそらく神官職の可愛らしい少女だったのだ。

「あ、あの、皆さん？…どうかしましたか？」

メンバーから何も返答がないことに不安を抱き、顔を曇らせた少女の不安げな声に、メンバーは目が覚めたかのようにハッとした。
黙っていたメンバーの中で、最初に言葉を発したのはたっち・みーだった。
「えっと…。モモンガさんですか？」
「はい。あ、声も変えているので、驚かせてしまいましたね。すみません」
申し訳なさそうに少女もとい、モモンガはそう言って謝った。
アンデットの時とは違い、少女の姿のモモンガにメンバーたちは困惑した。
そして、モモンガという確認がとれてもなお、メンバーたちは少女の姿のモモンガを凝視してしまっていた。
「えっと…。そんなにジロジロ見られると流石に、恥ずかしいんですが…。笑っても良いんですよ？」
笑いながらモモンガはそう言った。
しかし、メンバーたちは別に可笑しくて笑いたいけど、失礼だろうから笑いを抑えているわけではない。
困惑しているのだ。モモンガが少女の姿になったことに。
そんな中、メンバーの中でいち早く気持ちを切り替えたのはペロロンチーノのだった。
「モモンガさん」
鬼気迫る声をペロロンチーノが発し、その声でペロロンチーノの雰囲気が変わったことに気づいたモモンガは驚愕した。
友人であるペロロンチーノが、今までに聞いたこともないくらいに真剣な声を発したからだ。
それ故に、ペロロンチーノから次に発せられ言葉に多少の恐怖心を抱いた。
ペロロンチーノは一体何をこんなにも真剣な様子で自分に伝えたいのだろうか。
まさか、何かペロロンチーノ気にさわるようなことを自分はしてしまったのだろうかと…。

「えっと…、な、なんですか…？ペロロンチーノさん」
平常心を装おうとモモンガが絞り出したようにその言葉を発した。
すると、ペロロンチーノは席を立ち、モモンガに近づいてモモンガの肩を掴んだ。
モモンガの中の恐怖心が更に募る。
そして、ペロロンチーノがモモンガが予想だにしないを言葉を発した。
「俺の嫁になって下さい‼？」
モモンガはペロロンチーノの言葉の意味が理解できず、思わず素っ頓狂な声を返す。
「……え？」
ヨメ？誰ガ？何ノコト？トイウカ、ナンデコノ人ハ息ガ荒イノ？
「是非とも『お兄ちゃん』と呼んで下さい‼？」
「……は？」
「いや、モモンガさんの今の格好だと『お兄様』の方が良いですね。やっぱり、『お兄様』でお願いします‼？」
いや、お願いされても困ると思いながらも、モモンガはようやく言葉が飲み込めた。
しかし、次に、少女の姿の自分に錯乱して、興奮しきった今のペロロンチーノをどうすればいいのかモモンガは戸惑った。
「さあ、早く言って下さいモモンガさん‼？上目遣いで‼？頬を赤らめて‼？目を潤ませて‼？祈り、縋る様なポーズで‼？」
徐々に顔を近づけ、迫るペロロンチーノに先ほどとは異なる恐怖心をモモンガは抱いた。
「落ち着いて下さい‼？こ、怖いですよペロロンチーノさん‼？」
「大丈夫です。怖いことはしませんよ‼？ただ、お兄様と気持ちいーー」
「「そんなに命を捨てたいなら素直にそう言ってくれれば良いのにペロロンチーノお兄様？」」
「申し訳ありませんでしたー‼？‼？」

先ほどま席に座っていたはずの三人の低い声が背後から突然聞こえ、ペロロンチーノは命の危機を悟り、すぐに三人に向かって綺麗な土下座をして大きな声で謝罪をした。
いつの間にやら、たっち・みー、ウルベルト、タブラの三人はペロロンチーノの背後に移動して、ただならぬ殺気をペロロンチーノに向けて仁王立ちしていたのだ。
いや、たっち・みーに関してはペロロンチーノの首に剣を突きつけていた。
「出来心だったんです!!?許して下さい!!?釈明の余地をください!!?」
ペロロンチーノの必死なその言葉が届いたのかたっち・みーは剣を収め、ペロロンチーノの言葉に耳を傾けた。
「だって神官ですよ!!?犯しがたい高潔な女の子を堕とすのはエロゲのきほーー」
刹那、収めていたはずのたっち・みーの剣が恐ろしい音をたてて、ペロロンチーノの近くの床を破壊した。
「殺す」
怒りが頂点に達し、剣を振り上げたたっち・みーが地を這う様な低い声を発した。ペロロンチーノはたっち・みーのその様子に全身を震わせた。
「誠に申し訳ありませんでした!!?私が悪かったです!!?どうかお命だけはお助け下さい!!?仲間じゃないですか!!?」
「あなたのことなど知りませんね…。ただ、これだけはわかります。貴様が今刻んでいるのは最悪の記憶だ」
「あれ!!?俺の存在を記憶から抹消しようとしいらっしゃる!!?ごめんなさい!!?た、助けて下さいーーーー!!?!!?イヤーーーーーー!!?!!?!!?」
こうして、ペロロンチーノの絶叫が上がったのと同時に、たっち・みーによる制裁が始まり、サービス終了の時刻が迫り、他のメンバーから止められるまで続いた。